

地区安全特集：“キューバ危機”から南シナ海情勢を見る

漢和防務評論 20160831 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国は、フィリピンのルソン島から西方わずか 220KM のスカボロ礁を占拠し埋立てようとしています。

この環礁の位置は中国が地対地ミサイルを配備した場合、フィリピンの米軍基地が射程に入ります。

米空軍は同環礁の上空を飛行し中国領と認めない姿勢を示していますが、KDR は、国際裁定を無視し中国が軍事基地化を進めるならば、米軍との軍事衝突は避けられない、としています。

KDR は、旧ソ連の指導者フルシチョフと習近平の政策を比較し、かつてのキューバ危機を例にとり、起こる可能性のある軍事衝突の態様を予想しています。

平可夫

中国「南華早報」によると、中国は今年下半期から、黄岩島（スカボロ礁）の埋立を開始するという。この環礁はフィリピンのルソン島から西方わずか 220 KM しか離れていない。中国が最近埋立てた南シナ海のその他の 7 個の人工島と異なるところは、中国が現在まで施設を建設しておらず、人が住んでいないことだ。3 年前には、中国漁民がここで悪天を避けたことからフィリピンと中国で主権争いが起きていた。フィリピンは、すでにこの案件を国際法廷に提訴した。米国は、すでに国際法廷の仲裁結果を尊重することを表明していた。しかし中国は、仲裁裁定の結果を受け入れられないとのべた。国際仲裁の結果は、米国の黄岩島に対する今後の立場を明らかに左右する。今年になって米軍の A-10、F-18E/F 攻撃機、戦闘機が 2 度黄岩島上空を飛行した。このことは米国が中国の黄岩島に対する主権を認めず、したがって黄岩島の今後の情勢の進展が、最近中国が埋め立てたその他の 7 個の環礁とは異なることを意味する。

南シナ海問題は、すでに米中間の軍事摩擦に発展する熱点となっている。KDR は、核大国の間の大規模核戦争の発生、通常兵力による軍事衝突の可能性がすでに零に近くなったと従来から認識していた。しかし、米中間でごく短期間の、限定的軍事衝突が発生する可能性はある。核大国間の軍事衝突の典型的モデルとしては、朝鮮戦争、1961 年のベルリン危機、1962 年のキューバ危機がある。台湾海峡及び南シナ海方面において、米国は、同様の方式をもって拡大中の中国との間で発生する軍事衝突に対処する可能性が極めて高い。しかもこの種の

軍事衝突は、中国内部で深刻な政治問題を生み出す可能性が高い。旧ソ連で、フルシチョフが 1964 年に下野した主な理由の一つが“キューバ危機”に示すフルシチョフの冒険主義であり、この事件はソ連軍の自尊心を大いに傷つけた。ソ連軍と KGB はブレジネフを首領とする政治連盟を支持し、フルシチョフは（“非正常”な方式で）任期を待たずに下野した。

この 3 種類の核大国間の直接対抗モデルは、時期的に最初は朝鮮戦争である。1996 年、本誌総編集がロシアの前線航空軍司令官 NIKOLAI ANTOSHKIN 大将を取材した際、雑談の中で彼は次のように述べた：朝鮮戦争の空中戦にはソ連が直接出兵し、米国空軍と大規模、全面的空戦を行った。ピーク時には 1000 機近いソ連機が戦闘に参加し、戦争後期にはソ連軍パイロットは直接ロシア語を使用した。米国人はその事実を知っていたが公表しなかった。90%の空中戦闘が米ソ間で行われ、中国人や朝鮮人パイロットは単に“空中遊撃隊”として活動しただけである、と。この証言はある事実を証明した。すなわち：“朝鮮戦争は、一夜にして中国を空軍大国にした”との宣伝が虚言だったことだ。1949 年、ソ連は最初の原子爆弾を爆発させ、核保有国となった。この時点から朝鮮戦争は、核大国間で初めて通常戦力によって全面对峙する軍事衝突となった。特徴は：正面から戦う直接衝突ではなく、各自面子を保持したまま、秘密裏に戦闘したことである。

1960 年以降のフルシチョフの対米外交・軍事政策は、今日の習近平の政策に酷似している。相当強硬で、露骨に強さを誇示する。南シナ海での大規模埋立は、周辺国家との外交関係の改善に何の利益ももたらさない。米日との外交関係で孤立することは何の利益もない。また中国の経済、民主主義、内政問題改善にも何の利益もない。習近平の考え方は基本的にフルシチョフと同じであろう。すなわち軍人に迎合して軍の支持を獲得し、自らの権力を強化するためである。

しかし習近平は、本質的にはフルシチョフと完全に同じではない。1961 年、東ベルリンの多くの民衆が西ベルリンに逃亡した。フルシチョフは東ベルリンの境界に戦車を配備するよう命じた。米軍も戦車を出動させた。砲口対砲口、対峙すること十数時間、最後にフルシチョフは自ら戦車を撤退させた。ベルリンの壁の建設は第二次ベルリンの危機として有名である。

この時の核大国対峙の特徴は次の通り：相互に直接軍事的威嚇を働きかけるが終始コントロールできる状態を保ち、エスカレートはさせないが、戦闘開始直前の状態は維持する。

1962年のソ連の挑発はさらにピントがはずれていた。フルシチョフは中距離核ミサイルをキューバに運び、直接米国を核威嚇しようとした。これは如何なる道理も存在しなかった。当時、米国がキューバに進攻する問題は存在しなかった。ピッグス湾事件後、米国がキューバからの亡命者を再び支援する計画は全くなかった。このとき核大国の対峙はエスカレートし、核戦争発生の度合いが高まり、米軍は警戒の度を高めた。米国はキューバの封鎖を宣言し、その直後ソ連はミサイルを撤去した。最終的にフルシチョフはミサイルを撤去したのである。

ほぼ同時期、彼はニクソンに対して直接脅しをかけた：ソ連は、ソーセージを生産するように大陸間弾道弾を生産できる、と。また彼は、“誰が誰を埋葬するか”の著名な論議を提議した。彼は、戦略ロケット軍を大いに発展させ、陸軍を縮小した。彼は、核戦争に勝つためである、と主張した。

フルシチョフはなぜこのような物議をかもし発言をしたのであろうか？彼は真に核戦争を戦かおうとしたのだろうか？それは全く違う。フルシチョフが自ら初めて米国に提議したのは“平和共存”“平和競争”の外交政策であった。彼は、中共との論戦において、中共の好戦的姿勢を批判、毛沢東が主張した核戦争後に建設する“真っ赤な社会主義の平和社会”を狂言とし、核戦争の結果一廃墟と死体の山一を忘れていると批判した。

ソ連のこの時代の歴史をよく見ると、フルシチョフの対外政策の本質は、内心世界も含めてスターリンに比べれば余程理知的であったことは疑いがない。彼は戦争を好まなかった。特に核戦争を。しかしなぜ政策がこのように表裏一体でなかったのか？

一方、習近平の本心は何なのか？継続して監視する必要がある。

さらに権力闘争の問題がある。状況は1957年の“カガノビッチ”反党集団事件から説き起こす。カガノビッチ、モロトフ、ブルガーニン等は、政治局会議でフルシチョフの解任を求めた。彼は反論した：自分は中央委員会で選出された第一書記である。罷免するには中央委員会を通さねばならない、と。国防部長のジューコフ元帥は、フルシチョフを支持した。連夜、飛行機を飛ばして地方の中央委員をモスクワに運んだ。彼らの多数は、フルシチョフの政治改革、権力の移譲を歓迎し、彼を支持した。中央委員会では、ブルガーニン、カガノビッチは反党集団となった。ジューコフは反乱を起こした。

1958年、フルシチョフは、権力闘争において軍人が邪魔になると考えた。特にジューコフを。ジューコフは、バルカン半島の訪問から帰着後、国防部長の職務を解かれ、ボルガ軍区司令に左遷された。軍人の支持を得ることがフルシチョフの政治理念の一つであった。彼は、陸軍内で最も友好的なパートナーであるマリノフスキー元帥を陸軍総司令及び後任の国防部長に抜擢した。二人の友好関係は祖国防衛戦争時代から始まっていた。フルシチョフはなぜ軍人の支持をとりつけることに迫られたのであろうか？その理由は、軍の経歴不足にあった。スターリンは實際上、制服軍人であった。彼は内戦時期から直接軍隊を指揮していた。しかしフルシチョフは、祖国防衛戦争初期には西南方面軍の政治委員に過ぎず、中將級で、長年ウクライナで党委員会第一書記を務めた。ベリヤ、後続のブルガーニン、ウォロシーロフは軍の経歴がフルシチョフよりも遙かに長かった。これから比較すると、習近平の軍歴は、フルシチョフにもはるかに及ばない。軍の支持なくしては、第二の趙紫陽、胡耀邦になる可能性がある。政治局会議で反対派に罷免される可能性すらある。

ここで本誌は、社会主義国家の権力闘争を人事制度から見ている。周知のとおり、ソ連時代、西側のソ連研究学派は、人事制度を相当重視し、テレビや新聞を通じて政治局委員の序列、動き、地位等々を詳細に観察した。現在も、習近平の権力闘争を研究するうえで類似の方法が採用されている。

KDR としては：この方法は当然重要であり、科学的に研究する必要がある、とは考える。しかしこれがすべてではない。

1964年のフルシチョフ政変についてのソ連の笑い話は次の通り：ブレジネフだけはフルシチョフの陰謀を止めることができない、彼は、フルシチョフが直接抜擢した腹心中の腹心だから、と。なぜか？謀議グループの中でブレジネフが最も悪逆であった。かつて **KGB** 首脳であったセミチヤストヌイは、回顧録で：ブレジネフは私に、フルシチョフを失脚させることが可能かどうか尋ねた。私は、中央委員会の命令がなければ不可能だと答えた、と述べた。周知のとおり、フルシチョフは、ソ連共産党の歴史上、権力闘争に最も貢献をしている：

その一、彼は、失脚させた人間の肉体までは消滅させなかった。カガノビッチ、モロトフの反党集団は、個人的にうまく処理した。モロトフは蒙古大使に左遷した。

その二、胡耀邦のように、彼は、大勢の高級幹部を解放し、冤罪を被ったものを名誉回復させた。

胡耀邦、趙紫陽は誰によって失脚させられたのか？政治局会議では、大多数の

古い仲間たちは、薄一波を含め、胡耀邦が名誉回復させた者達である。

フルシチョフ、習近平は、いかにして軍隊の支持を得たか？当然、軍隊に対する投資を増やし、自分の仲間の幹部を昇進させる。同時に、国外ではさらに強硬な軍事外交政策を採り、強さを見せつける。如何なる国家においても、軍人は、最も保守的で強硬な利益集団である。しかし今回の政策はうまくゆかず“第二のキューバ危機”になるであろう。一旦、米軍の反撃を受けたら、例え再び“阿 Q 精神”を発揮し如何に自説をこじつけようとも、軍を如何にコントロールできるのか？

南シナ海の問題に戻ると、米軍戦闘機及び攻撃機は、三々五々黄岩島上空を飛行している。この問題に対する米軍のやり方はすでに明らかになっている：すなわち黄岩島を中国領土と認めることはできない、と。この点、米軍は、埋め立てた他の 7 つの環礁に対する姿勢とは明確に区別している。一旦、黄岩島が国際法廷の場でフィリピン領土とされ、一方の中国は継続して同島上に軍事施設を建設するようであれば、米国は国際法の支持という有利な状況の中で、武力行使に入る可能性が最も高い。

軍事的な意義からいえば、もし中国が黄岩島に飛行場を建設したならば、戦闘機は、フィリピン所在の若干の米軍補給基地への攻撃が可能になる。もし YJ-62 型地对艦、地对地ミサイルが配備されると、射程は、フィリピンの米軍基地に到達する。KDR が何度も図上演習を行ったところ：もし中国が撤収しなければ、中米間の南シナ海の勝負地点は黄岩島である可能性が高いことが分かった。国際裁定が出たのち、飛行場建設が開始され、レーダー、ミサイル、水中ソナーシステムの配備が始まった場合、可能性のある米軍の対応策は以下の通り：

一、“キューバ危機”モデル：黄岩島の封鎖を宣言、中国が従うまで、飛行場の建設中止、ミサイル配備の中止を要求する。一旦、この状況が出現した場合、阿 Q 精神勝利法をもって如何に中国民衆及び軍隊を納得させられるか？一旦面子がつぶされると、習近平は第二のフルシチョフになり、軍の支持を失う。

二、ベルリン戦車対峙モデル：たとえ中国人が黄岩島に入り、飛行場、陣地を建設したとしても、米海空軍は頻繁に上空を飛行また 12 海里内に進入し、艦載砲、及び戦闘機のレーダーで中国の海軍、空軍の目標を照準する。長期にわたって対峙することになる。

三、一旦、黄岩島が国際法廷でフィリピン領土と裁決された場合、中国は裁決を無視、同島に進出し建設する。フィリピン海空軍は再三の警告後、発砲する可能性がある。一旦、砲火を交えると、米空軍は中国と直接空中戦を始める可能性が極めて高い。朝鮮戦争モデルが再現することになるのか？

KDR は、次のように考える：米軍が何度も黄岩島の上空を飛行するのは軍事的脅威をエスカレートさせる。このことは、中米間の南シナ海の軍事的対決に一步近づく。しかしこの地区で本当に中米間の空中戦が発生した場合、2008年に本誌が類似の図上演習を行ったが、双方の巨大な伝統文化の差異、宗教、民族性、軍事実力、国際外交、実戦経験等々の要素を勘案すると、戦争の推移、結果は一方的であった。アラブとイスラエルの空戦結果を見ればよく分かる。現在、**KDR** はこのように結論を出している。

以上